

預言の霊——導き、教える働き

ハバククの二つの板

Jeff Pippenger

2012-10-15

ハバククの二つの石板 95のうち3

序論：ハバククの二つの板の基礎

この連載は「ハバククの二つの表」と呼ばれている。これまで私たちは、1843年図表および1850年図表からいくつかの真理を取り上げてきたが、現段階ではそれらを聖書的に弁証するためではなく、エレン・ホワイトがこれらの真理を支持していることを確立するためである。私たちの主張は、もしあなたがこれらの基礎的真理を拒むなら、同時に預言の霊をも拒んでいるということである。私たちはまずこのことを記録にとどめておきたい。

ミラー派の歴史と真夜中の叫びの概観

最初の発表において、私たちはミラー派の歴史、すなわち1798年から1844年までの道標を概観した。前回の発表では、遅延の時から1844年10月22日の戸の閉鎖に至るまでの歴史を、より綿密に考察し、その時期を真夜中の叫びとして特定した。真夜中の叫びは、1844年8月12日—17日のエクセター野営集会において歴史の中に入り、1844年10月22日まで継続した。1844年3月に始まった遅延の時は、真夜中の叫びの一部であり、その使命を宣べ伝える民を整えるための清めの過程でもあった。

私たちは昨日、これをあなたがたの心と思いと確立したいと望んだ。神の御言葉にある遅延の時に関するすべての事例は、世の終わりについて語っている。エレン・ホワイトは、第一コリント10:11について注解して、こう述べている。「古代の預言者たちは皆、自分たちが生きていた時代以上に、私たちの時代のために語ったのである。」第一コリント10:11にはこう記されている。「さて、これらのことが彼らに起こったのは、私たちへの戒めのための事例としてであり、それが書き記されたのは、世の終わりに臨んでいる私たちを戒めるためである。」ミラー派の歴史は、世の終わりに起こることの歴史である。遅延の時と、その後が続くことについてのこれらすべての聖書の歴史は、ミラー派の遅延の時と真夜中の叫びにおいて何が起こるかを例示している。歴史は繰り返されることになっているのであるから、私たちはこれらのことを理解する必要がある。

2520——エレン・ホワイトの支持

これらの図表における第一の論点を私たちは扱ってきましたが、それについてはあまり多く言及してきませんでした。私たちがまず示したい教理、すなわちエレン・ホワイトが明確に支持していることを示したい最初の教理は、2520です。最初の二つの発表は、私たちをここへ導くために構成されていました。明日の朝、私たちはこの図表における「日々のこと」の考察を開始します。

主の導きと教えを覚えること

『ライフ・スケッチ』196ページから始めましょう。「主がこれまでどのように私たちに導かれたか、また私たちの過去の歴史における主の教えを、私たちが忘れるのでない限り、将来について何も恐れるには及ばない。」将来について、クリスチャンが恐れるべきただ一つのは、道からそれて失われることです。恐れるべきことは、永遠の命を得られないことです。ここでホワイト姉妹は、将来について私たちが恐れるべきものは、二つのことを除いて何もないと言っています。これはアドベンチズムにおける預言の霊の中でよく知られた一節ですが、彼女が言及している導きとは何であり、教えとは何であるのかを、だれかが詳しく説明するのを耳にすることはまれです。

彼女の言及する導きが、真夜中の叫びの歴史を指していることを、これから示す。真夜中の叫びの歴史において、キリストは、遅延の時、真夜中の叫びの到来と宣布、そして1844年10月22日における戸の閉鎖において導いておられた。主は、その歴史を、信仰によって御自分と共に至聖所へ入ることのできる民を生み出すために設計されたのである。私たちは、その特定の歴史を、主の教えと同様に、忘れることを恐れなければならない。

私たちは、真夜中の叫びを生み出した特定の教えがあったことを示すであろう。その教えとは、1840年8月11日におけるオスマン帝国の崩壊ではなく、また、ミラー派の歴史における第二天使のメッセージの歴史の中で現れた死者の状態に関する教えでもなかった。真夜中の叫びを生み出したのは、主が導かれたミラー派の歴史における特定の教えであり、そして私たちが将来について恐れるべきことは、主の導きとその教えとを忘れることのほかには何もない。

私たちは、主の導きと主の教えの両方の象徴が真夜中の叫びであることを提言する。エレン・ホワイトの最初の幻から、この一節をもう一度読んでみよう。「この道の上を、再臨信徒たちは、その道のはるか先にある都へと進んでいた。道の初めには、彼らの後方に明るい光が据えられており、御使いが私に、それは真夜中の叫びであると告げた。この光は道の全体を照らし、彼らの足元を照らして、つまづかないようにしていた。彼らが、すぐ前におられて都へと導いておられるイエスを見つめ続けているならば、彼らは安全であった。しかし、やがてある者たちは疲れ果てて、その都はまだずっと先にあり、自分たちはもっと早くそこに入るものと期待していた、と言った。するとイエスは、その栄光ある右の御腕を上げることによって彼らを励まされた。そして、その御腕から光が放たれ、それが再臨の群れの上に揺れ動くとき、彼らは『ハレルヤ!』と叫んだ。ほかの者たちは軽率にも、自分たちの後ろにあるその光を否定し、それほど遠くまで自分たちを導き出したのは神ではなかった、と言った。」

彼らは真夜中の叫びを否定しており、しかもその真夜中の叫びに関連して、主が真夜中の叫びにおいて彼らを導いておられたのではないと論じている。彼らは、真夜中の叫びにおける神の導きを否定しているのである。「彼らの後方の光は消え去り、その足もととは完全な暗闇となり、彼らはつまづいて、目標とイエスを見失い、道から落ちて下の暗く邪悪な世界へと落ちていった。」

文脈における真夜中の叫び

2520を扱う前に、その文脈を明らかにするため、ミッドナイト・クライの歴史をもう一度見てみよう。

『各時代の争闘』391—395頁より。「主の来臨が最初に期待されていた時、すなわち1844年の春が過ぎたとき」——これが遅延の時であり、最初の失望である——「その現れを信仰をもって待ち望んでいた人々は、しばらくの間、疑いと不確かさのうちに置かれた。世の人々は、彼らが完全に敗北し、迷妄を抱いていたことが証明されたものとみなしたが、なお彼らの慰めの源は神の言葉であった。多くの者は引き続き聖書を探り、自らの信仰の証拠をあらためて吟味し、さらなる光を得るために預言を注意深く研究し続けた。」

もし多くの者がこれを行ったのであれば、それはそうしなかった者たちもいたことを意味する。そこには「彼ら」とは記されておらず、「多くの者」と記されているのである——ここには二つの階級がある。「彼らの立場を支持する聖書の証拠は、明白で決定的に思われた。誤りようのないしるしが、キリストの来臨が近いことを指し示していた。罪人の回心と、クリスチャンの間における霊的生命の復興との双方に現れた主の特別な祝福は、そのメッセージが天より出たものであることを証ししていた。そして、信者たちは自分たちの失望を説明することはできなかったけれども、神がこれまでの彼らの経験を導いてこられたのであることを確信していた。』

彼らが再臨の時に適用されるものとみなしていた預言の中には、彼らの不確かさと宙ぶりの状態に特にふさわしい教えが織り込まれており、また、現在は彼らの理解にとって暗いままであることも、やがて時至れば明らかにされるであろうと信じて、忍耐強く待つよう彼らを励ましていた。

その段落には、「彼らが再臨の時に適用されるものと考えていた預言と織り交ぜられていた……」とあります。彼らは、どの預言が再臨に適用されると信じていたのでしょうか。2520、2300、そして1335です。彼らは、これら三つの時の預言がいずれも1843年に終わり、それが再臨であると信じていました。

これらの預言の中には、ハバクク2:1-4の次の預言があった。「私は見張り所に立ち、やぐらの上に身を置き、主が私に何を語られるかを見よう。また、私が責められたとき、何と答えるべきかを見届けよう。すると主は私に答えて言われた。『この幻を書き記し、板の上に明らかに記せ。これを読む者が走りながらでも読めるためである。なぜなら、この幻はなお定めのためのものであり、終わりについて語って、偽ることがないからである。たとえそれが遅れるように見えても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない。見よ、心の高ぶる者の魂はその内にあって正しくない。しかし、義人はその信仰によって生きる。』」

1842年の早い時期に、すでにこの預言のうちにある「この幻を板の上に書きしるして、走りながらでもこれを読むことができるようにせよ」との指示は、ダニエル書と黙示録の幻を図解するための預言図表を作成することを、チャールズ・フィッチに示唆した。この図表の出版は、ハバククに与えられた命令の成就とみなされた。しかしながら、その時には、幻の成就に見かけ上の遅延、すなわち逗留の 때가、同じ預言の中に示されていることに、だれも気づかなかった。失望の後、この聖句はきわめて重大な意味を帯びて現れ

た。「この幻は、なお定めの時のためである。しかし終わりにはそれは語り、偽ることはない。たとえ遅れるように見えても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない。…義人はその信仰によって生きる。」

1843年のチャートと預言の霊

あなたが定常的な働きをしているか、あるいは非定常的な働きをしているかは問題ではない——これらはそれぞれ、エレン・ホワイトが会議制の働きと自給伝道の働きのために用いた用語である。あなたがアドベンチズムにおける主要な自給伝道団体のもとに行こうと、あるいは総会や聖書研究所に行こうと、もし彼らに1843年チャートについて尋ねるなら、彼らは「このチャートには多くの誤りがある」と言うであろう。彼らは、このチャート上のいくつかの数字における「一つの誤り」の上に主が御手を置かれたと語るエレン・ホワイトと意見を異にしている。

しかし、彼らはまた、自らを神の御言葉に対立する立場に置いている。ハバクク書には、この幻は「……偽ることがない」と記されている。先駆者たちが1843年のチャートに掲げるべきであり、実際に掲げたその幻は、ハバクク2章の成就である。これこそ、彼らがこのチャートに載せるべきであった幻であり、そしてハバクク2章は、この幻は「……偽ることがない」と述べている。したがって、このチャートは「誤りだらけ」であると言うとき、あなたは預言の霊にも聖書にも反対しているのである。

エゼキエルの預言の一節もまた、信者たちにとって力と慰めの源であった。「主の言葉が私に臨んで言われた。人の子よ、イスラエルの地であなかがたが語っているそのことわざは何か。『日が延び、すべての幻はむなしくなる』と言っているではないか。それゆえ彼らに告げよ、主なる神はこう言われる。……その日は近づき、すべての幻の成就する時が来ている。……わたしが語れば、わたしの語る言葉は成就する。それはもはや延ばされることはない。」また、「イスラエルの家は言っている。『彼の見る幻はなお多くの日の後のことであり、彼は遠い将来の時について預言しているのだ。』それゆえ彼らに告げよ、主なる神はこう言われる。わたしの言葉はもはや一つとして延ばされることはない。わたしの語った言葉は成就する。」エゼキエル12:21-25, 27, 28.

礼拝者の二つの階級

彼女が礼拝者の二つの階級について語っていることに注目しなさい。彼女は、この失望が訪れたとき、多くの者が預言の研究を続けたと述べており、それは、研究を続けなかった階級があったことを示している。私たちは、この二つの階級の区別について、さらに多くの光を受けるであろう。

ハバクク2章1-4節の成就とは、この1843年のチャートと1850年のチャートである。ハバクク書においてさえ、4節は「義人はその信仰によって生きる」と述べ、また「その心の高ぶる者」についても語っている。そこには、礼拝する者たちの二つの階級が描写されている。真夜中の叫びの歴史は、礼拝する者たちの二つの階級を生み出し、そしてその二つの階級がハバクク書において取り上げられている。

次の段落で、ハバクク書2章とエゼキエルに言及した後、彼女はその諸階級の一つを「待ち望む者たち」と特定している。「待ち望む者たち」とはだれか。彼らはダニエル書12章を成就している者たち、すなわち「待ち望んで千三百三十五日に至る者は幸いである」に当たる者たちである。この階級が、待ち望む者たちなのである。

待ち望む者たちは、初めから終わりを知っておられるお方が時代を見渡し、彼らの失望をあらかじめ見越して、彼らに勇気と希望の言葉を与えておられたのだと信じて、喜んだ。

私たちは、東欧のある国で数年間働いてきた一人の姉妹から電話を受けました。彼女はその国の出身で、アメリカ合衆国へ移住しましたが、このメッセージを理解したとき、再び帰国しました。彼女は抵抗に直面しており、以前の教会の家族が、彼女に「門戸を閉ざす」ために、その国の指導者たちに働きかけてきました。最近、主は彼女のために、このメッセージを諸集会に分かち合う門を開いてくださいました。

彼女は今朝早く電話をかけてきて、障害の一つが交通手段であることを分かち合った。彼らはこのメッセージを携えて巡回し、教えるために自動車を必要としていたが、そのための資金を欠いていた。ところが、彼らがこの地に着くや否や、主に心を動かされたアメリカ合衆国の友人たちが、自動車を購入するのに十分な資金を送ってきた。

これは、失望した人々に起こっていた種類の経験であった。彼らは失望していたが、主は彼らを聖書へと導き、「この失望はわたしの導きによるものであった。ただ前進し続けなさい」と言って彼らを励まされた。

もし彼らに対し、忍耐をもって待ち、神の御言葉に対する確信を堅く保つよう勧めるこのような聖句がなかったなら、あの試練の時に於いて、彼らの信仰は失われていたであろう。

十人のおとめのたとえと遅延の時期

十人のおとめのたとえとハバクク書2章とを姉妹ホワイトがどのように結びつけているかに注目しなさい。そこでは、いずれも遅延の時と二つの礼拝者の階級とが論じられているのである。

マタイ25章の十人のおとめのたとえもまた、アドベンチストの民の経験を例示している。マタイ24章において、弟子たちが御自分の来臨と世の終わりのしるしについて尋ねた問いに答えて、キリストは、御自身の初臨から再臨に至るまでの世界と教会の歴史における最も重要な出来事の幾つか、すなわち、エルサレムの滅亡、異教および教皇制による迫害の下における教会の大患難、日と月の暗黒化、そして星の落下を指摘された。この後、主は御国における御自分の来臨について語り、その出現を待ち望む二つの階級のしもべを描いたたとえを述べられた。25章は、「そのとき、天国は十人のおとめにたとえられるであろう」という言葉をもって始まる。ここには、終わりの日に生きる教会が示されている。」——今、彼女はこれをミラー派の歴史に適用しているが、彼女が何を言っているかに注目しなさい——「ここには、終わりの日に生きる教会が示されている。」——「終わりの日に生きる教会」とはだれか。それは私たちである。

それは、第24章の結びにおいて指し示されているのと同じことである。このたとえにおいて、彼らの経験は東方の婚礼の出来事によって例証されている。「そのとき、天の御国は、ともしびを取って花婿を迎えに出て行った十人のおとめにたとえられるであろう。そのうち五人は賢く、五人は愚かであった。愚かな者たちは、ともしびは取ったが、いっしょに油を持って行かなかった。しかし賢い者たちは、自分のともしびとともに、器に油を入れて持っていた。花婿が来るのが遅れたので、彼女たちはみな眠気がさして眠り込んだ。ところが真夜中に叫ぶ声がした。『見よ、花婿が来る。迎えに出よ。』」

第一天使の使命によって告げ知らされたキリストの来臨は、花婿の来ることによって表されているものと理解された。そのまもない来臨の宣言のもとに広く起こった宗教改革は、おとめたちが出て行ったことに相当していた。このたとえにおいても、マタイ24章と同様に、二つの階級が示されている。すべての者は、自分たちのともしび、すなわち聖書を携え、その光によって花婿を迎えるために出て行った。しかし、愚かなおとめたちは油を持たずにともしびを取ったのに対し、賢いおとめたちは器の中に油を入れていた。賢い者たちは神の恵み、すなわち聖霊の新生させ、光を与える力を受けており、それによって御言葉は彼らの足のともしびとなっていた。彼らは真理を学ぶために聖書を研究し、心と生活の純潔を切に求めた。これらの者たちは、失望や遅延によっても覆されることのない、神とその御言葉に対する個人的経験と信仰を持っていた。他の者たちは衝動によって動き、兄弟たちの信仰に頼り、よい感情に満足してはいたが、真理についての徹底した理解も、恵みの真の働きも欠いていた。彼らは遅延と失望に備えていなかった。試練が来ると、彼らの信仰はくじかれ、そのともしびは薄暗く燃えるだけであった。

「花婿が遅れたので、」

花婿が遅れたのはいつであったか。1844年3月22日である。彼は遅れている。では、今何が起ころうとしているのか。この二つの階級が現されるのである。

真夜中の叫びを忘れ、その道から下の邪悪な世に落ちて行くとき、私たちは福音を理解していないことを示している。永遠の福音とは、試みる預言的メッセージに基づいて、キリストが二つの礼拝者の階級を生み出す働きである。遅延の時から戸が閉じられる時に至るまで、これこそ永遠の福音の頂点である。ここにおいて主は、遅延の時にある二つの階級を取り上げ、彼らを御自身とともに審判へ導こうとし、彼らが真に油を持っているか否かを証明するために、試みの過程を通らせられる。これこそ、金を滓から、小麦を毒麦から、賢い者を愚かな者から分けるキリストの働きの頂点である。

「花婿の来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠ってしまった。」花婿の遅延によって表されているのは、主が来られると期待されていた時の経過、失望、そして見かけ上の遅れである。この不確かな時期にあって、表面的で中途半端な者たちの関心はほどなく揺らぎ始め、その努力も緩んでいった。しかしただ個人的な聖書の知識に基づいて信仰を持っていた者たちは、失望の波にも洗い流されることのない岩をその足もとに有していた。「みな、うとうとして眠ってしまった」。一方の組は無関心のうちに、また自らの信仰を投げ捨てて眠り、他方の組は、より明るい光が与えられるまで忍耐深く待っていた。それでも、試練の夜にあっては、後者もある程度、その熱心と献身を失ったように見えた。中途半端で表面的な者たちは、もはや兄弟たちの信仰

にもたれかかることはできなかった。各人が自らのために立つか、あるいは倒れるかしなければならなかったのである。

失望が到来したとき、二つの階級は異なる仕方で眠り始めた。しかし、賢いおとめたちでさえ、その熱心さの幾分かを失っていた。主はこのことにおいて導いておられたのであり、それは、エクセター・キャンプ・ミーティングにおいて真夜中の叫びのメッセージがもたらされたとき、主が彼らの間に一つの働きを成し遂げられるためであった。

試みの過程——遅延の時と真夜中の叫び

『預言の霊』第4巻228ページより、「この過程——すなわち、遅延の時から戸が閉じる時に至るまでの真夜中の叫び——が、主が御自分の民を試みておられることであることを、覚えていなさい。エクセターの天幕集会における真夜中の叫びは、その宣布から1844年10月22日に至るまで、その歴史の一部分にすぎない。それは、礼拝する二つの階級の間における真夜中の叫びの効果のための備えをなす遅延の時から切り離して考えることはできない。あなたは真夜中の叫びを理解しなければならない。なぜなら、もしそれを理解しないなら、あなたは道から落ちるからである。」

「神は御自分の民を試そうとされた。預言的期間の算定における一つの誤りは、御手によって覆われていた。その御手、すなわち主の御手は、複数の預言的期間の算定における一つの特異な誤りを覆われた。再臨信徒たちはその誤りを見いださなかったし、また彼らの反対者の中で最も博学な者たちにもそれは見いだされなかった。後者はこう言った。『あなたがたの預言的期間の算定は正しい。何らかの大いなる出来事が、まさに起ころうとしている。しかし、それはミラー氏の予言することではない。それは世界の回心であって、キリストの再臨ではない。』」

期待の時は過ぎ去ったが、キリストは御自分の民を救い出すために現れなかった。真実な信仰と愛をもって自らの救い主を待ち望んでいた者たちは、痛切な失望を味わった。しかし、主は御自身の目的を成し遂げておられた。すなわち、御再臨を待っていると公言していた者たちの心を試されたのである。彼らの中には、真理への愛よりもむしろ恐れに動かされていた者が多くいた。期待されていた出来事が起こらなかったとき、これらの者たちは、自分たちは失望していないと断言した。彼らは、キリストが来られることを一度も信じてはいなかったのである。彼らは、真の信者たちの悲しみを嘲笑した最初の者たちの中にいた。

これが主のご目的であった。将来について、私たちには何も恐れるべきものはない。ただし、主が私たちの過去の経験においていかに私たちを導いてこられたかを忘れる場合を除いてであり、また、私たちの過去の経験における主の教えを忘れる場合を除いてである。私たちが申し上げているのは、この導きを主の教えから切り離すことはできない、ということである。

『Life Sketches of James White and Ellen G. White』1888年版、186-187頁：「神は、1843年における時の経過によって、ご自分の民を試し、また証明された。彼らが預言的期間を計算するにあたって犯した誤り——まことに特異な誤り——は、キリストの来臨を待ち望んでいた人々の見解に反対していた学識ある人々にさえ、ただちには見いだされなかった。これらの深遠な学者たちは、その期間を締めくくる出来事に

つについてはミラー氏と見解を異にしていたが、時の計算については彼が正しいと宣言した。しかし、彼らも、また待ち望んでいた神の民も、時に関する問題においては共通の誤りの中にあった。』

私たちは、神がその知恵において、御自分の民が失望を経験するように定められたことを、全く信じている。しかもその失望は、心をあらわにし、真実な品性を形成するのにきわめて適切なものであった——単に彼らの心を示すためだけでなく、その品性を形成し、それが真夜中の叫びにおいて到来する危機の時に実証される点にまで至らせるためであった。神のさばきを恐れることによって第一天使のメッセージを受け入れ、真理を愛し天の王国における嗣業を願ったからではなかった者たちは、今やその真の姿を現した。彼らは、イエスの来臨を心から待ち望み、これを愛していた失望した人々を、真っ先にあげける者たちの中にいた。この神によるきわめて鋭い試練は、試みの時に自らの信仰を否んで責任と汚名を避けようとする者たちの真の品性を明らかにした。

失望を経験した者たちは、暗黒のうちに見捨てられたのではなかった。というのは、切なる祈りをもって預言的期間を探求する中で、その誤り——ただ一つの誤り——、そして預言の筆跡が遅延の時を通過してなお続いていることが見いだされたからである。キリストの来臨を喜びに満ちて待望する中で、幻の見かけ上の遅延は考慮に入れられておらず、それは悲しくも予期しない驚きであった。しかも、まさにこの試練こそ、真理に対して誠実な信者たちを育成し、強めるためにきわめて必要であった。遅延の時はきわめて必要であった。それは、二つの階級を明らかにし、また、真夜中の叫びから戸の閉ざしに至る歴史の中で実証されることになる彼らの品性の形成を始めるためであっただけでなく、この争点において正しい側に立つことになる者たちを強めるためにも必要であった。あなたがたは、遅延の時を真夜中の叫び、あるいは戸の閉ざしから切り離すことはできない。

真夜中の叫びを否定するとき、あなたはまさにその歴史を否定しているのである。真夜中の叫びとは、単にエクセターのキャンプ・ミーティングにおけるサミュエル・スノウのメッセージではなく、遅延の時の経験そのものである。これこそ主が導いておられたところである。われわれが将来について恐れるべきものは何もない。ただし、主がわれわれの過去の歴史—すなわち、主がミラー派の歴史において永遠の福音を頂点へと至らせ、二つの礼拝者の群れを生じさせられたこの遅延の時と真夜中の叫びの歴史—において導いてくださったことを忘れるのであれば、その限りではない。

『初期文集』74ページ：「わたしは、1843年の図表が主の御手によって導かれたものであり、それは改変されるべきではなかったこと、また、その数字は主が望まれたとおりのものであったことを見た。主の御手がそれらの数字の幾つかにおける一つの誤りを覆い隠しておられたので、主の御手が取り除かれるまでは、だれもそれを見ることができなかつたのである。」

不法の奥義と試みの過程

もし時間があるなら、私たちは不法の奥義について論じることができるでしょう。不法の奥義には一つを超える正しい定義があり得ますが、ここでは、それは、主が御自分の民を試みられる聖なる歴史の中で、悪を善と、真理を誤謬と混ぜ合わせるサタンの働きを指しています。主が御自分の民を試練の過程へと導かれる聖書の聖なる歴史においては、

あなたは常に不法の奥義——すなわち、真理を誤謬と混ぜ合わせるサタンの働き——を見るでしょう。人々がこの試みの時点に至るとき、不法の奥義は諸問題を曇らせてきたのです。

ノアの試みの時が来たとき、それに先立ってサタンの種が神の種と混ざり合っていたことを、聖書は私たちに告げている。これこそが、ノアの時代に不法の奥義を成就させたものであり、創世記においては、神の子らが人の娘たちを妻として迎えたこと、すなわち二つの種の混合として表されているのであって、それはノアの試みの前に先行する不法の奥義である。

モーセと紅海における試練について、聖書は、紅海とシナイにおいて試みられることになるイスラエルが、長くエジプトにいたために、エジプトの教えによって腐敗させられていたことを描写している。それが不法の奥義、すなわち、サタンのような教えに影響されることであった。

ユダヤ人の時代においては、サンヘドリンがその試みの過程を退ける道を備えたのは、ギリシアの教えであった。

ミラー派の歴史において、プロテスタント諸教会のミラー派信徒は、純粋な種を不純な種によって墮落させた教皇制の一二六〇年に及ぶ影響から、まさに抜け出したばかりであり、その結果、ミラー派の歴史の試験に先立つ不法の奥義が生み出された。

それが、常に存在している不法の奥義である。

不法の奥義がどのように働くかを研究するなら、『人類のあけぼの』第一章を参照しなさい。ホワイト姉妹は、サタンが天においていかにして不法の奥義を成し遂げたかを私たちに語っている。天においては、どの天使たちがとどまり、どの者たちが取り除かれるかに関する試みが行われようとしていたのであり、サタンはその試みの過程に先立って、まさに天において不法の奥義を成し遂げていたのである。

サタンは、疑いをほのめかし、自分の言葉を神の御言葉の上に置き、さらに重要なことに、他者に自分の偽りの教えを語らせることによって、これを行った。これは邪悪な活動である。彼はあなたの心に疑いを植え付け、その後、あなたは外に出て、その疑いを一団の人々に語るのである。もしだれかがその疑いについて不満を述べるなら、彼らは彼に対してではなく、あなたに対して不満を述べることになる。

最近、ワシントン州スポケーンのある牧師が『初代文集』74頁についてコメントし、こう述べた。「私はエレン・ホワイトの時代の辞書、すなわちウェブスター辞典を調べたが、figures には算術に関わる意味はまったくない。」それを聞いた大多数の人は確認しようとはせず、彼の言うことを信じたであろう。少なくとも、その牧師はこの箇所において figures が何を表しているのかについて疑いを蒔いていたのであり、実際には、彼は偽りを語っていたのである。ウェブスター1828年版辞書は次のように述べている。FIGURE, n. 算術において、数を示す記号。たとえば 2、7、9。

彼は疑いを表明しており、不法の奥義として示されている働きを行っていた。彼は、もしアドベンチストたちがそれを見ようとするならば、地上の歴史のこの時代にあっては、

あなたがたは自ら真理を理解しなければならず、人間の言うことに耳を傾けてはならないということを、彼らのために明らかにしていたのである。なぜなら、「……不法の奥義は、すでに働いているからである。……」

『初代文集』74ページ：「……その図表が御自分の望まれるとおりであったこと、また、幾つかの数字における誤りの上に御手があり、それを覆い隠されたので、御手が取り除かれるまでは、だれもそれを見ることができなかった。」

それは論点のすり替えであり、神学者たちはしばしばそのようなことを行う。聖書あるいは預言の霊において、ある語が何を意味するのかを理解したいのであれば、まず辞書に当たるのではなく、預言者に当たるべきである。たとえば、ダニエルはダニエル8:11で、ヘブライ語の rum という語を用いており、それは「取り去られた」と訳されている。人々はそれが「除かれた」という意味だと考えるが、ダニエルは rum を他に五回用いており、そこでは一度として「取り去る」を意味しない。それは「高く上げる、そして高める」という意味である。したがって、ダニエル8:11における rum が「取り去る」を意味すると考えるのは、ダニエルがその語をどのように用いているかに従うのではなく、伝統に従うことである。

同様に、エレン・ホワイトについても、もし『初代文集』74頁における“figures”が美術作品の人物像や図版を意味すると主張したいのであれば、「エレン・ホワイトの時代の辞書には、figures が算術を意味するとは書かれていない」と言うかもしれません。しかも、多くの人々がそれを確かめないだろうと当て込んで。しかし、もし実際に調べてみれば、figures が確かに算術を意味することを見いだすでしょう。

しかし、まず最初に立ち返るべきところは、エレン・ホワイト自身である。すなわち、彼女が「数字」と言うとき、何を意味しているのか。『初期文集』74頁で、彼女は「主の御手がある数字の誤りの上に置かれ、それを覆い隠した」と述べ、また236頁では、「主の御手が預言的期間の計算における誤りを覆った」と述べている。この女預言者は、自らの用語である「数字」が、預言的期間——すなわち、図像ではなく算術——を表していることを明示している。

それでは、主は何に御手を覆われたのであろうか。主は、預言期間の計算——すなわち数値——における誤りの上に御手を覆われたのである。

エレン・ホワイトによる2520の支持

これが核心です。多くの人々が私たちと同じメッセージを提示しており、私は彼らを支持しています。しかし、2520の問題、そしてエレン・ホワイトがそれを有効な預言であると信じていたかどうかという点に関しては、これこそが論拠であり、これこそが証拠であって、あなたが出発点とすべきものです。他のすべての論証も有効であり真実ですが、これが出発点です。

『初期文集』74ページにおいて、主がいくつかの数字の誤りの上に御手を覆われたと述べられている箇所について、彼女は同書236ページで、その意味を次のように定義している。「わたしは、神の民が喜びに満ちた期待をもって、その主を待ち望んでいるのを見た。しかし神は、彼らを試みることを意図しておられた。」彼女が語っているのは、延長時

期 [1844年3月22日]、すなわち最初の失望のことである。

彼女は1844年10月22日の大失望について語っているのではない。なぜなら、彼らはその時にもまた試されることになるからである。ここで彼女が語っているのは、1844年3月22日、すなわち遅延の時についてである。「神は彼らを試そうと意図された。」「その御手は、預言的期間の計算における誤りを覆っていた。」では、神はどのようにして遅延の時によって彼らを試そうとされたのか。それは、預言的期間についての彼らの理解の上に御手を置いておられることによってであった。われわれが将来について恐れるべきものは何もない。ただし、主が過去において、ミラー派の歴史の中で、また御自身の教えによって、いかにわれわれを導いてこられたかを忘れる場合を除いては、

これらの預言的期間こそ、遅延の時を生じさせた教えである。「彼の御手は、預言的期間の計算における一つの誤りを覆われた。主を待ち望んでいた者たちは、この誤りを見いださなかった」——単数の誤りである——「また、その時に反対していた最も博識な人々も、それを見ることができなかった。神は、御自分の民が失望に会うように定められた。時は過ぎ去り、救い主を喜ばしい期待をもって待ち望んでいた者たちは悲しみ、意気消沈した。一方、イエスの現れを愛さず、ただ恐れゆえにその使命を受け入れていた者たちは、期待していた時に主が来られなかったことを喜んだ。彼らの信仰告白は心に影響を及ぼさず、生活を清めてもいかなかった。時の経過は、そのような心をあらわにするために、まことによく計られていた。彼らこそ、最初に立ち返って、自分たちの救い主の現れを真実に愛していた悲しみに沈む失望した者たちをあざけた者たちであった。私は、神が御自分の民を試み、彼らに鋭い試験を与えて、試練の時にしりごみして退く者たちを明らかにされることのうちに、神の知恵を見た。

イエスと天の万軍はみな、その魂の愛するお方にお目にかかることを甘美な期待をもって待ち望んでいた人々を、同情と愛をもって見つめておられた。彼らの試練の時を支えるために、天使たちがその周囲を飛び交っていた。天からの使命を受け取るとを怠った者たちは暗闇のうちに残され、神が天から彼らに送られた光を受け入れようとしなかったために、神の怒りは彼らに向かって燃え上がった。主がなぜ来られなかったのかを理解できなかった、その忠実でありながら失望した人々は、暗闇のうちに見捨てられはしなかった。再び彼らは聖書へと導かれ、預言の期間を探求した。主の御手はその数字から取り除かれ、その誤り——ただ一つの誤り——が説明された。

ここで彼女は、1843年図表の数字における誤りを説明しており、しかも彼女はすでに、それらの数字が預言的期間を表していると明言している。「彼らは、預言的期間が1844年にまで及ぶこと、そして、預言的期間が1843年に終結すると示すために彼らが提示していた同じ証拠が、それらが1844年に終わることを証明するのを見た。」これで論議は終わりである！ エレン・ホワイトは2520に承認の印を押している。

1843年の図表において、彼らが1843年に終わると理解していた預言的期間は、ただ三つ、すなわち1335、2520、そして2300のみであった。神は、この図表に示された預言的期間、すなわちその数値の一部における誤りの上に御手を置いておられ、その御手を取り除かれるまではそれを覆っておられた。神がその御手を取り去られたとき、忠実に待ち望んでいた者たちは再び預言的期間を研究するよう導かれ、彼らをして預言的期間が1843年

に終わると提示させたのと同じ証拠が、その時には、そのうち二つが1844年に終わったことを証明するものとして認識された。

1335年は西暦508年に始まり、1843年に終わる。2520年は紀元前677年に始まり、年の完全さの影響を受ける。先駆者たちはそれが1843年に終わると考えていたが、後に、彼らを1843年の予告へと導いたのと同じ証拠が、2520年の預言が1844年に終わることを証明していると理解した。2300日の預言は紀元前457年に始まり、彼らはそれが1843年に終わると考えていたが、大失望の後、預言期間の研究を通して、それが1844年に終わることを悟った。

彼らが1843年に終結すると予告した預言はただ三つしかなく、そのうちの一つは実際に終結する。すなわち、1335である。この預言は、主が御手を置いて覆われたものではない。それは、遅延の時から真夜中の叫びを経て、1844年10月22日に至るまでのミラー派の歴史を示している。

昨日の発表において、私たちはエレン・ホワイトの次の引用をもって終えました。「1843年と1844年に見られた事柄を見た目は幸いである。」これは、「1843年に来る者は幸いである」ということです。次の段落で、彼女はこう述べています。「その使命は与えられた。そして、その使命を繰り返すことに遅れがあってはならない。なぜなら、時のしるしは成就しつつあり、締めくくりの働きは成し遂げられなければならないからである。大いなる働きが短い時のうちに行われるであろう。やがて、神の定めにより、一つの使命が与えられ、それは大声の叫びへとふくれ上がるであろう。その時、ダニエルは自らの分に立って、その証しをするであろう。」『Manuscript Releases』第21巻、437。

自らの分に立つダニエルとは、ダニエル12章13節である。「1843年と1844年に見られた事柄を見た目は幸いである」とは、12節である。エレン・ホワイトはダニエル12章12-13節について神的注解を与えており、これらの節は時の預言についてではなく、1843年と1844年を含む一つの経験、すなわち1843年に関する誤解によって生じ、その結果として遅延の時を生み出す経験について語っていると述べている。遅延の時が来るとき、「待ち望む者は幸いである」。幻が遅れるとしても、それを待て。遅延の時から戸が閉じられる時に至るまで忠実に待つ者は幸いである。忠実な者が1843年と1844年に見るものは、彼を至聖所へと導く祝福である。

1335日の預言は1843年に終わり、真夜中の叫びの到来をしるしづけた。2520年および2300日の預言期間は1844年に終わる。エレン・ホワイトは、2520年、2300日、および1335日が1843年に終わると彼らに宣言させたのと同じ証拠が、その後、それらが1844年に終結することを証明するものとして認識されたと述べている。

神の御言葉からの光が彼らの立場を照らし、彼らは一つの延引の時を見いだした——「たといそれ〔その幻〕が遅れても、それを待て。」キリストの即時の再臨を慕うあまり、彼らは、真に待ち望む者たちを明らかにするよう定められていたその幻の延引を見過ごしていたのである。再び彼らには一つの時の時点があった。しかるに私は、彼らの多くが、その甚だしい失望を乗り越えて、1843年に彼らの信仰を特徴づけていたあの程度の熱心と力とを保つことができなかつたのを見た。

サタンとその使いたちは彼らに打ち勝ち、その使命を受け入れようとしなかった者たちは、それを妄想と呼び、それを受け入れなかった自分たちの先見の明と知恵を誇って互いに祝し合った。彼らは、自分自身に対する神の勧告を退けていることにも、また、天より送られた使命を生きていた神の民を惑わすために、サタンとその使いたちと結託して働いていたことにも、気づかなかった。

この歴史において、礼拝者には二つの階級がある。不忠実な階級は待ち望む者たちを嘲るが、待ち望む者たちは預言的期間へと導き戻され、1843年に2520年と2300年の終結を特定するに至らせたのと同じ証拠が、それらが1844年に終わったことを証明するものであることを理解するようになる。

待ち望んでいた者たちはこのことを認識していたとはいえ、最初の失望以前ほどには主に対して燃えるようではなかった。彼らは真夜中の叫びの使命によって再び燃え立たされることになる。待ち望んでいた者たちは、真夜中の叫びに先立って、すでに一八四四年、すなわち諸預言の終結を理解していた。

真夜中の叫びのメッセージは、待ち望んでいた者たちが1844年10月22日を特定することを可能にした。その情報によって、それは単に1844年のどこかということではなく、まさにこの日であったのであり、それがそのメッセージに力を与えた。

その過程がおわかりですか。この経験を生み出す教えは、三つの預言、すなわち一三三五、一二三〇〇、そして二五二〇です。

これを悟ったのち、彼らは「バビロンから出よ」と宣べ伝え始めた。これが第二天使の使命である。

はっきりさせておこう。ためらいの時に終わるのは何であるか。1843年の図表の使用である。彼らは、主が1844年に来られることを今や理解していた一方、その図表は1843年と示していたため、この図表を脇に置いた。こうして彼らは、第二天使の使命の歴史のために、その図表を脇に置いたのである。

第二天使の歴史において、彼らのメッセージはどのようなものとなるのか。最後の段落がそれを説明している。

このメッセージを信じる者たちは、諸教会において圧迫を受けた。しばらくの間は、このメッセージを受け入れようとしないうちも、恐れのためにその心に抱く思いを行動に移すことを抑えられていた。だが、時の経過は彼らの真の感情を明らかにした。彼らは、待ち望む者たちが、預言的期間は1844年にまで及ぶのであると証しせざるを得ないと感じていたその証言を、封じようと望んだ。

どの預言的期間であろうか。2520、2300、そして1335である。これが、この歴史における彼らのメッセージである。今や彼らは、「わかりました！ これらの預言は1844年にまで及びます」と言っている。真夜中の叫びの歴史における彼らのメッセージは、2520年と2300年の預言である。

しばらくの間は、その消息を受け入れようとしないうちも、心中の思いを行動に表すことを恐れによって抑えられていた。だが、時の経過は彼らの真の感情を明らかに

した。彼らは、預言の期間が1844年にまで及ぶことを、待ち望む者たちが余儀なく証ししなければならぬと感じていたその証言を、沈黙させようと願った。信者たちは、自分たちの誤り—特異な誤り—を明確に説明し、また、なぜ1844年に主の来臨を期待したのか、その理由を述べた。彼らに反対する者たちは、提示された力強い理由に対して、何ら反論を持ち出すことができなかった。それでも諸教会の怒りは燃え立ち、彼らは証拠に耳を傾けまいと決意し、また他の者たちがそれを聞くことができないように、その証言を諸教会から締め出そうとした。

2520を2300日に関連づけて提示すると、何が起こるでしょうか。ミラー派の歴史においては、諸教会から締め出され、そのメッセージを封じようとする試みがなされます。

神が彼らにお与えになった光を、他の人々に差し控えることをあえてしなかった者たちは、諸教会から締め出された。だが、イエスは彼らと共におられ、彼らはその御顔の光のうちに喜びに満たされていた。彼らは第二天使の使命を受ける備えができていた。」『初代文集』235-237頁。

2520についての研究に立ち入ることなく、私たちが示そうとしているのは、エレン・ホワイトが2520に承認の印を押しているということである。もしこれが見えないのであれば、イエスがあなたの目からうろこを取り除いてくださるよう祈る必要がある。エレン・ホワイトは、彼らを1843年の予測へと導いたのと同じ証拠が、それらの預言期間が1844年に終わったことを証明するものとして、そのとき見いだされたと述べた。彼女は常に、預言期間、あるいは諸数値を複数形で示している。1843年のチャートにおいて1843年に終わる預言期間は、ただ三つしかない。

1843年に終わるその一つ、すなわち1335は、彼女が「figures」および「prophetic periods」と言うためには、文法上の正確さのために、少なくとも二つの預言的期間を必要とする。もし三つあって、そのうち一つを取り除くなら、彼女が是認している二つは2520と2300であり、他の誰が何を言おうとも、それは変わらない。

この歴史の中で、すなわち1844年10月22日におけるアドベンチストの大失望をも含めて、主は、彼らが諸教会から締め出されるという経験を生み出しておられた。それは、彼らが人の影響の上にはなく、神の御言葉の上に立つことができるためであった。彼らには、イエス・キリストと共に至聖所へ進入するための信仰を持つために、その経験が必要であった。主は、永遠の福音を完結へと導くために、彼らを完成へと導いておられた。

先駆者たちの証言——ジェームズ・ホワイトとユライア・スミス

次に、二人の先駆者、ジェームズ・ホワイトとユライア・スミスがいる。現代の神学者たちが、ジェームズ・ホワイトは1863年に2520を退け、ユライア・スミスも1870年代および1880年代の著作においてそれを退けたと主張する際に、主として引き合いに出すのがこの二人である。

これから私たちは1844年、そしてその直後へと立ち返り、エレン・ホワイトがたった今述べたこの同一の歴史を、ジェームズ・ホワイトとユライア・スミスがいかにかに描写しているかを見ることにする。彼女は預言的期間について語り、主が御手を引かれ、その結果として誤りが明らかになったことについて述べているが、この二人の先駆者たちもまた

同様に語っている。

エレン・ホワイトは「2520」あるいは「七つの時」とは述べていないが、ウライア・ミスとジェームズ・ホワイトはそう述べている。彼らは、この歴史において認識されていた預言的期間が2520と2300であったことを明確にしている。

ジェームズ・ホワイト『Review and Herald』第1巻、1851年7月9日：「ある反対者はこう言う。『私は、真夜中の叫びがまだ与えられたとは信じていない。』われわれもまた、真夜中の叫びがわれわれによって聞かれたとは信じていないし、また、それが今後聞かれることになるとも信じていない。マタイ25:6の『見よ、花婿が来る』という叫びは、東方の婚礼の歴史の中にある。しかし、一つの叫びが与えられ、それが1844年秋に再臨信徒の全体によって完全に受け入れられ、しかもそれが警えにおける真夜中の叫びとよく符合するものであったということは、その中において経験を有した者たちによって否定されるべきではない。」

ジェームズ・ホワイトが扱っているのは、人々が真夜中の叫びを拒み、その道から踏み外していくという歴史である。彼はこれに応答しており、この歴史について論じるであろう。

それは時宜にかなって到来した。たとえの叫びは、ためらいと、まどろみ眠ることの直後に発せられた。これは、失望を味わったのちの私たちの遅延に続いて起こり、私たちが休眠状態にある間に耳に達した。その叫びは十人のおとめを目覚めさせ、彼女たちにそのともしびを整えさせた。これは、御霊の力を伴って、再臨信徒たちを奮い立たせ、かつてないほどに聖書を探求させ、また自分自身とこの世の所有物とをことごとく主に献げるよう導いた。主が一八四四年の第七の月に来られるであろうと叫びを発した者たちは、預言的期間がその時にまで及ぶことを明確に見ていた。それゆえ、一八四三年に再臨があることを証明するために諸期間から提示されていた証拠は、それが一八四四年にあることを証明するものであった。私たちはそのとき、二千三百日の終点を一八四三年とするその計算法に誤りがあることを見た。再臨に反対して書いた者たちのうち、そのことを見抜いた者は一人もいなかった。摂理の御手——大文字の「P」——が、その時が来てそれが見いだされるまで、その誤り——単数——を覆っていたのである。その誤りとは、七十週がそこから数えられる勅令が発せられた際に、紀元前四五七年のうちすでに経過していた年の端数をまったく考慮に入れずに、二千三百から四五七年を満年数として差し引き、その結果一八四三年を導き出したことにある。

「われわれの思いがその時点〔1843年〕へと向けられたのは、これら種々の預言期間を、その開始を示すはずであった諸出来事の成就を、最も優れた年代学者たちが割り当てているそれらの年から起算すると、いずれもその年に終わるように見えたという事実によるのである。」

ここで彼は、彼らが1843年に終結すると考えていた預言的期間について、私たちに語っている。

「しかし、これは見かけだけのことであった。」すなわち、彼らが1843年に終わったように見えたにすぎなかった。彼らは、彼らが1844年に終わったことを見いだす

のである。

「われわれは『七つの時』、すなわち2520年を、マナセの捕囚から起算するが、これは年代学者たちによって、きわめて一致して紀元前677年に置かれている。」これが、彼らが扱っていた預言的期間であった。「この年代こそ、われわれがこの期間の開始点として、かつて常に起算してきた唯一のものであった。そして、2520年から紀元前677年を差し引くと、紀元1843年が残った。しかしながら、2520年を満たすためには、紀元前677年の完全な677年と、紀元1843年の完全な1843年とを要すること、したがってまた、この期間が紀元前677年の初めより後に始まったのでありうる限り、それに応じてこの期間を紀元1844年の中にまで延長しなければならないことを、われわれは認識していなかった。」

「摂理の御手がその誤りの上に彼の手を置いておられた」という預言的期間には、2520も含まれていた。

ユライア・スミス：「時が西暦1843年を過ぎてもなお進むにつれて、多くの人々は、自分たちが期待していた解放の年に関して失望した理由を問い始めた。そのとき明らかになったのは、われわれが常にその起点を置いてきたとおり、すべての預言的期間を紀元前の年に開始させるならば、たとえわれわれの年代計算とその開始年代が正確であるとの仮定に立ったとしても、それぞれの期間は1844年のうちのある時点に至るまで完了しない、ということであった。すなわち、紀元前677年に始まる七つの時、すなわち2520年、大ヨベル、すなわち2450年〔1843年図表にも1850年図表にも示されていない。〕であって紀元前607年に始まるもの、そしてダニエルの2300年であって紀元前457年に始まるものについて言えば、これらの預言的期間がそれぞれ起算されたそれらの年の一部は、その開始を画するいくつかの出来事が生起する前にすでに経過していたのであるから、それぞれを算定する紀元前年の年初からではなく、その開始がその年の初めより後であったのと同じだけ、それらの期間は西暦1844年の中へ延びなければならなかった。そうして初めて、各期間の年数を満たすことができ、あるいはまた、われわれの年代計算の正確さを検証することができたのである。しかし、各期間がそれぞれ紀元前のその年のいつ始まったかを示す手がかりは存在しなかった。したがって、それらが満了する年のうちの時点も、正確に定めることはできなかった。」

ユライア・スミスとジェームズ・ホワイトはともに、1844年に終結すると認められていた預言的期間が2520年と2300年であったことを、エレン・ホワイトが『初代文集』236ページ以下において用いているのと同じ表現を用いて証言している。

真理の鎖——ウィリアム・ミラーの起算点 私はこれまでしばしば、神が1840年代のミラー派運動を導かれたと信じる理由を尋ねられてきた。それは、単に神がその働きを祝福されたからではなく、その運動の根底をなす要点の一つ一つを、主が周到に、明確に、かつ否みがたく備えられたように見えるからである。全体は、一連の結び合わされた環のようであった。もし一つでも動かされれば、すべては崩れ去るであろう。だが、それらは動かされなかった。最初に、ミラーが立たねばならなかった出発点そのものがある。それは、預言的期間をどこから数え始めるべきかという問いであった。ダニエル8章14節の二千三百の

夕と朝は、恣意的な位置から始めることはできない。もし時の計算が正しいのであれば、起算点もまた正しいのでなければならない。ミラーが見るに至ったのは、ダニエル8章と9章とが互いに切り離されたものではないということであった。9章では、ガブリエルが再び現れ、以前に十分説明されていなかった幻について、ダニエルに悟らせるために来たと告げる。そこでその御使いは、七十週が「あなたの民とあなたの聖なる都のために定められている」と指し示す。これは、より長い期間から切り取られたものでなければならなかった。そして、この期間は、「エルサレムを回復し建て直せという命令が出る時から」始まるのである（ダニエル9:25）。ここに、鎖の最初の確かな環があった。もし、エルサレムを回復し建て直すための命令を定めることができるならば、七十週の起算点を見いだすことができる。そして七十週が二千三百日の最初の部分であるなら、二千三百年全体の起算点もまた見いだすことができる。しかし、どの命令であったのか。エズラ記には、ペルシヤの王たちによって出された、互いに関連する三つの布告が記されている。キュロスが神殿の再建を許可した。ダレイオスはその布告を確認した。しかしアルタシャスタ王の第七年において初めて、この命令はその完全な範囲において効力を持った。すなわち、神の家のみならず、エルサレムにおける国家的・司法的秩序の回復にまで及んだのである。エズラ記7章に記されたこの布告によって、ユダヤ人の政体は、ペルシヤの支配のもとにありつつも、真に再建された。これが、預言が要求する命令であった。ゆえにその年代は重大であった。すべては、アルタシャスタ王の第七年がいつであるかに懸かっていた。この点においては、ミラーだけが立っていたのではない。広く受け入れられていた年代学は、それを紀元前457年としていた。もしその年代が誤っていれば、紀元1844年に至る計算は成り立たない。もしそれが正しければ、この問題に関する時の証しは確立されるのである。驚くべきことに、ミラーは年代学を自ら作り出したのではなかった。彼は、最良の歴史家たちが提供していたものを受け取ったのである。プトレマイオスの正典は、ペルシヤ王たちの年次を、古代の天文観測に裏づけられたかたちで保持していた。そしてその正典によれば、アルタシャスタ王の第七年は紀元前457年に当たる。これは推測ではなく、古代世界の権威ある歴史的記録によって支えられた事項であった。したがって、鎖は堅く保たれた。起算点は、個人的な空想や新奇な理論に基づくものではなく、聖書そのものの要請と、歴史の確立された記録との両方に基づいて定められたのである。このことにより、ミラー派の運動は、容易に動かされ得ない堅固な土台を得た。のちに人々は、1844年に起こると期待されていた出来事について誤っていたことを示した。しかし、その期間に関する計算においては、起算点は依然として定まったままであった。これこそが、私が主の御手をそこに見る理由の一つである。もし神がご自身の民を、一つの大きいなる預言的運動へと導こうとされたのであれば、その運動が単なる思いつきや幻影に基づくものではなく、試験に耐えることのできる点に結びつけられるようにしておかれるのは、もっともなことである。そしてまさにその

ことが、ここに見いだされるのである。鎖の第一の環は、天によって堅く据えられていたのである。

『初代文集』230ページ：「神はご自分の御使い」——御使いガブリエル——「を遣わして、一人の農夫」——ウィリアム・ミラー——「の心に働きかけられた。彼は聖書を信じていなかったが、預言を探求するよう導かれた。神の御使いたちは、その選ばれた者を繰り返し訪れ、その思いを導き、神の民にとって常に暗かった預言を彼の理解に開いた。真理の鎖の端緒が彼に与えられ、彼は次から次へとその環を探り続け、ついには驚嘆と称賛をもって神の御言葉を見つめるに至った。彼はそこに完全な真理の鎖を見た。靈感によるものではないと彼が見なしていたその御言葉が、今やその美しさと栄光のうちに彼の視界の前に開かれた。彼は、聖書の一つの部分が他の部分を説明することを見た。」——ガブリエルは彼に、私たちがプルーフ・テキストングと呼ぶ方法、すなわち、教えに教えを加え、ここにも少し、そこにも少しという方法を示した。

ガブリエルは彼に、真理の連鎖の端緒と、聖句をもって立証する方法を授けた。

ウィリアム・ミラー『Advent Review and Sabbath Herald』1854年4月18日：「聖書をさらに研究した結果、私は、異邦人の覇権の七つの時は、ユダヤ人がマナセの捕囚において独立国家であることをやめた時に始まらなければならないと結論した。最良の年代学者たちはこれを紀元前677年に位置づけている。また、2300日の期間は七十週とともに始まり、その起点を最良の年代学者たちは紀元前457年としていると結論した。さらに、常供の取り除かれることと荒らす憎むべきものの設置とをもって始まる1335日は、[ダニエル12:11] 異教の憎むべきものが取り除かれた後に教皇権の覇権が確立された時から起算されるべきであり、私が参照し得た最良の歴史家たちによれば、それはおよそ西暦508年から始まるものとされるべきであった。」

エレン・ホワイトは、ガブリエルがウィリアム・ミラーに真理の連鎖の起点を与えたと述べており、ウィリアム・ミラーは、自分に与えられた三つの起点が西暦508年、紀元前677年、そして紀元前457年であると証言している。彼は、真夜中の叫びの歴史を生み出したこれらの預言の起点を、天使ガブリエルによって与えられたのである。

最後の欺瞞——預言の霊を拒むこと

『セレクトッド・メッセージズ』第1巻48ページ：「サタンは……絶えず偽物を押しつけて、真理から人々を引き離そうとしている。サタンの最後の欺瞞は、神の御霊の証を無効なものとすることである。」サタンの最後の欺瞞は、預言の霊を滅ぼすことである。

もしあなたがこれらの基礎的真理を拒むなら、あなたは同時に預言の霊をも拒んでいるのである。エレン・ホワイトは2520に支持を与えている。2520を拒むなら、あなたは赤子も産湯もろともに投げ捨てているのである。

「サタンは……絶えず偽物を押しつけて、真理から引き離そうとしている。サタンのまさに最後の欺きは、神の御霊の証を無効にすることであろう。『幻がなければ、民はほしいままにふるまう』（箴言 29:18）。」彼女は預言の霊を拒むことについて語っており、これに関連して、もしあなたが預言の霊を拒むなら、幻がなければ民は滅

びる、と述べている。では、その幻とは何か。もしあなたが預言の霊を拒むなら、あなたに欠けているその幻とは何か。

「その幻を記し、これを板の上に明らかにしなせ。これを見る者が走るためである。」ハバクク 2:2 (KJV) . もしあなたがたが預言の霊を拒むなら、1843年の図表をも拒むことになる。そして、もしこの図表を拒むなら、あなたがたは預言の霊を拒んでいるのである。

「サタンは巧妙に、さまざまな方法によって、またさまざまな手段を通して、神の残りの民が真実の証しに置く信頼を揺るがそうと働くであろう。『証し』に対しては、サタンの憎悪が燃え上がるであろう。」私たちは時として、「サタンの」という語を、不気味な行為のこととして考える。しかし『人類のあけぼの』において、サタンは疑いをほのめかすことによって働くと言われている。それこそが、預言の霊とこれらの基礎的真理に対するサタンの攻撃なのである。そして、そのような疑いをほのめかすのは、私たちが信頼すべきものとされている人々によってである。

「証し」に対して、サタンの憎悪が燃え立たされるであろう。サタンの働きは、それらに対する諸教会の信仰を揺るがすことである。その理由はこうである。もし神の御霊による警告と譴責と勧告とが心に留められるなら、サタンは自らの欺きを持ち込み、魂をその惑わしのうちに縛り上げるための、これほど明白な道筋を持ちえないからである。」『セレクトッド・メッセージズ』第1巻、48頁。

これを結びとするにあたり、ホワイト姉妹が、将来について私たちが恐れるべきことは、主の導きを忘れること以外には何もない、と述べる時、私が言っているのは、彼女の語るその主の導きとは、Tarrying Timeから閉ざされた戸に至るまでの歴史、すなわち「The Midnight Cry」という語によって表される歴史である、ということである。将来について私たちが恐れるべきことは、主がThe Midnight Cryの経験においてどのように私たちに導かれたか、そしてまた、この導きに結びついている教えを、私たちが忘れること以外には何もない。この経験を生み出した教えとは、天使ガブリエルがウィリアム・ミラーに与えた年代をもって始まる三つの時の預言である。将来について私たちが恐れるべきことは、主が永遠の福音の頂点を通してミラー派を導かれた際に、The Midnight Cryの経験を生み出したこれらの教え——2520を含む——を、私たちが忘れること以外には何もない。

『Spalding and Magan』 305-306頁：「一つ確かなことがある。サタンの旗の下に立つ第七日再臨信徒たちは、まず第一に、神の御霊の証言の中に含まれている警告と譴責に対する信仰を捨てるであろう。」あなたが土台を退けるなら、あなたは預言の霊を退けているのである。もしあなたが預言の霊を退けるなら、あなたは土台を退けているのである。これらは一体となっている。預言の霊がないところには、幻もない。

より大いなる献身と、いっそう聖なる奉仕への召しが発せられており、そして今後も発せられ続けるであろう。今サタンの示唆を口にしてしている者たちの中にも、やがて正気に立ち返る者たちがいる。重要な信任の地位にありながら、この時の真理を理解していない者たちがいる。彼らに対して、この使命が伝えられなければならない。もし彼らそれが受け入れるなら、キリストは彼らを受け入れ、彼らをご自身と共に働く者とされるであろう。しかし、もしその使命に耳を傾けることを拒むなら、彼らは暗黒

の君の黒い旗の下に立つのである。

この時のための尊い真理が、人々の心にますます明瞭に開かれつつあると語るよう、私は示されている。特別な意味において、男女はキリストの肉を食し、その血を飲まなければならない。理解は発展してゆくであろう。なぜなら、真理は絶えざる拡張に堪え得るものだからである。真理の神的創始者は、彼を知ろうとして従い進む者たちと、いよいよ密接な交わりに入られるであろう。神の民がそのみことばを天からのパンとして受けるとき、彼らは、その現れ出ることが暁のように備えられていることを知るであろう。ちょうど食物を食べるときに身体が肉体的力を受けるように、彼らは霊的力を受けるのである。

イスラエルの子らをエジプトの束縛から連れ出し、荒野を通してカナンへ導かれた主のご計画を、私たちは半ばも理解していない。

「福音から輝き出る神聖な光線を集めるにつれて、私たちはユダヤの制度について、より明確な洞察を得、その重要な真理に対して、より深い認識を抱くようになる。私たちの真理の探究は、なお未完成である。私たちはただ、わずかな光の光線を集めたにすぎない。日々みことばを学ぶ者でない者は、ユダヤの制度の諸問題を解き明かすことはできない。彼らは神殿の奉仕によって教えられた真理を理解しない。神の大いなる計画に対する世俗的な理解のゆえに、神の働きは妨げられている。来たるべき生は、キリストが雲の柱に包まれてご自分の民に与えられた律法の意味を明らかにするであろう。」 Spalding and Magan, 305-306.

獣の刻印を受けてサタンの旗の下に立つそれらのアドベンチストは、まず第一に、預言の霊を拒む。

この一節には二つの階級がある。すなわち、主を知るためにさらに進み続け、引き続きその肉を食しその血を飲み、また神の御言葉を学び続ける者たちと、そうしない者たちである。真理の展開はまだ完結していない。彼らは聖所の務めについて、まだ語られていない事柄を語るようになるであろう。彼らは、キリストの時代における経綸の変化を強調し、それがミラー派の時代における変化を予表し、さらに、キリストが死者の審判から生者の審判へと移られる時の経綸を指し示していることを明らかにするであろう。彼らはまた、聖所について、そして主がこれらの経綸の変化において御霊の注ぎによって御自身の歩みをどのように示されるかについて、語るべきことを持つであろう。

あと二、三の引用を挙げれば、ほとんど終わりです。

真夜中の叫びを退けるセブンスデー・アドベンチストは、その小道から踏み外し、真夜中の叫びの歴史を生み出した主の導きと教理の教えとを退けるのである。私たちが恐れなければならないのは、まさにそのことである——すなわち、それらの教えを退け、その経験を理解しないことである。そのようにすることによって、私たちは預言の霊を退けているのである。

ホワイト姉妹は2520に承認の印を押している。私たちは、1843年のチャート上の他の諸真理にも、彼女がどのように承認の印を押しているかを示すであろう。

世界の終わりにおいて、これらすべてがわれわれの歴史の中で永遠の福音の頂点へと至るとき、アドベンチズムは、ウィリアム・ミラーの経験に見られるように、あらかじめ予表されていた三段階の試みの過程に直面することになる。

ウィリアム・ミラーは三つの誤りを犯した。(1)

彼は真夜中の叫びを退け、下にある邪悪な世界へと通じる道から落ちた。(2)

その後、彼は人間的影響力、すなわちジョシュア・ハイムズを頼みとした。(3)

彼は安息日を退けた。

一つの疑問が生じた。「彼は安息日を退けたのか、それとも聖所を退けたのか。」その時期において、地上の聖所から天の聖所へと移行した教えは、ミラーには十分には理解されていなかったのかもしれない。エレン・ホワイトが至聖所へと導かれたとき、彼女は契約の箱の中に十戒を見、そして安息日の戒めの周囲には聖なる輝きがあった。

ミラーが拒んだものは、神の律法——安息日であった。したがって、ミラーは真夜中の叫びを退け、その後、人の力に寄りかかり、そして獣の刻印を受けたのである。これは世の終わりにも繰り返される。

『教会へのあかし』第5巻211ページ：「ここに、教会——主の聖所——が、神の憤りの一撃を最初に受けたことが示されている。年老いた者たち、すなわち、神から大いなる光を与えられ、民の霊的利益の守護者として立てられていた者たちは、その委託を裏切っていたのである。」彼女は、封印について記されたエゼキエル書8章および9章に関して注解している。ホワイト姉妹は、エゼキエル書9章の封印は黙示録7章の封印と同じものであると述べている。彼女は、十四万四千人の封印の時期について語っている。彼女は、守護者となるべき者たちがその委託を裏切っていたと述べている。

「彼らは、かつての日々のような奇跡や神の力の著しい現れを、私たちは求める必要はない、という立場を取っていた。時代は変わったのだ。」彼らの第一の誤りは、真夜中の叫びに反対して、「この真夜中の叫びの歴史において起こったことは、繰り返されることはない」と言ったことであった。彼らは道から踏み外れつつある。

「これらの言葉は彼らの不信を強め、彼らはこう言う。主は善をも行わず、悪をも行われぬ、と。主はあまりにも憐れみ深いので、さばきをもって御自分の民を訪れることはないのである。かくして、『平和だ、安全だ』という叫びは、もはや二度とラッパのように声を上げて、神の民にその咎を、ヤコブの家にその罪を示すことのない人々から発せられる。このほえようとしない口のきけない犬どもこそ、傷つけられた神の正しい報復を身に受ける者たちである。男も、若い女も、幼い子どもたちも、皆ともに滅びる。」『教会へのあかし』第5巻、211。

エレミヤは、ウィリアム・ミラーの第二の失敗について語って、こう言った。「主はこう言われる。人に信頼し、肉なる者を自分の腕とし、その心が主を離れる者はのろわれる。」エレミヤ書17:5 (KJV)。もしあなたが人を信頼するなら、あなたの心は主から離れるのである。

終わりにおける第一の拒絶は真夜中の叫びであり、神の力の現れの再現である。第二は肉の腕に頼ることである。第三は日曜日法である。

ただ二つの階級しかありえない。各陣営は、それぞれ明確に、生ける神の印によって、あるいは獣またはその像の刻印によって、しるしづけられている。アダムの息子、娘は皆、おのおのその統率者としてキリストか、あるいはバラバのいずれかを選ぶ。そして、不忠実な者たちの側に身を置く者はすべて、サタンの黒い旗の下に立っており、キリストを拒み、侮辱的に扱った責めを負っている。彼らは、いのちと栄光の主を故意に十字架につけた者として責めを負っている。『Review and Herald』1900年1月30日。

確かなことが一つある。サタンの旗の下に立つセブンスデー・アドベンチストは、まず預言の霊に対する信頼を捨てるのである。

アドベンチズムは、ウィリアム・ミラーが失敗した三段階の試みの過程を繰り返している。だが、御使いたちは、ミラーをよみがえらせて彼の救い主のみもとへ連れ帰るために待っている。獣の刻印を受けるアドベンチストたちにとって、彼らを待っているのはその御使いたちではない。

「神の民の過去の経験は、死んだ事実として数えられるべきものではないことを、私は繰り返し示されてきた。私たちは、これらの経験の記録を、去年の暦を扱うように扱ってはならない。その記録は心に留めておかねばならない。なぜなら、歴史は繰り返されるからである。」『Publishing Ministry』175頁。

なぜ私たちは真夜中の叫びを覚えておく必要があるのでしょうか。なぜなら、歴史は繰り返されるからです。この歴史において、揺さぶりを引き起こすメッセージは2520と2300であり、このことのゆえに、人々は諸教会から追い出されることになるのです。

しかし、この歴史、すなわち真夜中の叫びは、実際に繰り返されるのでしょうか。それとも、ただの歴史にすぎないのでしょうか。次の引用に注目してください。

悪の中に、欺きと惑わしの中に、まさに死の陰のもとに横たわっている世界がある——眠っている、眠っている。彼らを目覚めさせようとして魂の苦悶を覚える者はだれであろうか。どのような声が彼らに届きうるであろうか。私の思いは未来へと運ばれ、そのとき合図が与えられるのである。『見よ、花婿が来る。彼を迎えに出よ。』しかし、ある者たちは、自分たちのともしびを満たすための油を得ることをぐずぐずと延ばしてしまい、あまりにも遅くなってから、油によって表されている品性は他に移すことのできないものであることを知るのである。」Review and Herald, February 11, 1896.

この真夜中の叫びの歴史は、文字どおりそのまま繰り返される。

エレン・ホワイトは、2520が有効な時の預言であり、またそれが主によって、遅延の時を生じさせるため、すなわち、キリストと共に至聖所へ信仰によって入るよう男女を備えさせた経験を生み出した失望をもたらすために用いられたことを理解していた。

私たちは、2520をまだ聖書から証明しようとはしていない。ハバククのものに関するこの研究において、私たちはまず、今日アドベンチズムによって退けられているこれらの教理をエレン・ホワイトが是認していることを明確にしたいと願う。その後で、聖書的研究へと進む。

